

地域の
かわら版

まるやま No.124



発行：令和6年10月10日 発行元：郷づくりまるやま 編集：地域づくり支援員
〒299-2592 南房総市岩糸2489（丸山地域センター内） <月1回程度発行>
TEL：0470-46-2388 FAX：0470-46-3991 市民活動応援サイト
URL：http://civil.mboso-etoko.jp 「みんなネット」⇒



第6回 フラワー❀フォトコンテスト



入賞作品展示 & 投票のお知らせ



展示・投票受付期間 **11月11日(月) ~ 12月6日(金)**
場 所 **丸山公民館内 (正面玄関入ってすぐ)**

「丸山地区を撮影した花のある風景」をテーマに寄せられた写真の中から選出された入賞作品を展示し、地域の皆さんからの投票で、はなはな賞・はなゆめ賞・佳作の各賞を決定します。

丸山の魅力ある花風景をぜひご覧いただき、ご投票ください！入賞者には賞品を贈呈し、投票者の中からも抽選で5名の方にQUOカードをプレゼントします。

がんばる地域応援クーポン券 利用期限10/31まで

市内のお店で利用できるクーポン券 (市民全員に5,000円分配布) の利用期限が迫っています。お早めに！ ☎ 商工課 33-1092



←利用方法
取扱店舗



丸山のできごと 「まるやままつり」

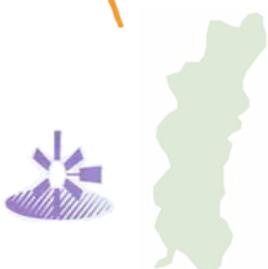
活気と笑顔を！

20年前の2004年10月10日、丸山町誕生50周年を祝う記念事業「まるやままつり」が2会場で行われました(町発足は1955年3月)。屋台11台、山車2台、神輿8基が一堂に会した盛大な合同祭。お囃子の競演、賀茂の花踊り、莫越山神社による奏楽と猿田彦の舞、地区の踊りなどが披露され、大いに賑わったようです。



また、お祭りなどで踊る「房総まるやま音頭」。歌詞には、風物や特色、歴史、名所など丸山を象徴するものが盛り込まれています。

お祭りの運営が大変になってきている昨今ですが、お祭りや踊りは地域をつなぎ、世代をつなぎ、地域を元気づけてくれます。



「風車と
ローズマリーの里」

「房総まるやま音頭」

- 1) 花のふるさと 丸山町は 咲いて伸びゆく 房総一さ ~略~
- 2) ローズマリーと 風車の里は シェークスピアも ほほえみかける ~略~
- 3) 清き流れの 丸山川で 磨くあの娘は 水晶の肌か ~略~
- 4) 緑豊かな 山ふところの 命支える 丸山ダムよ ~略~
- 5) 歴史語るか 嶺岡牧場 加茂の遺跡と 石堂史跡 ~略~
- 6) 人の情けと 文化の波が 溶けて栄える 丸山平野
サーサ踊ろよ 大きく丸く 踊りゃ町中 輪が出来る (ソレ)和が出来る~♪

<市民活動団体紹介>



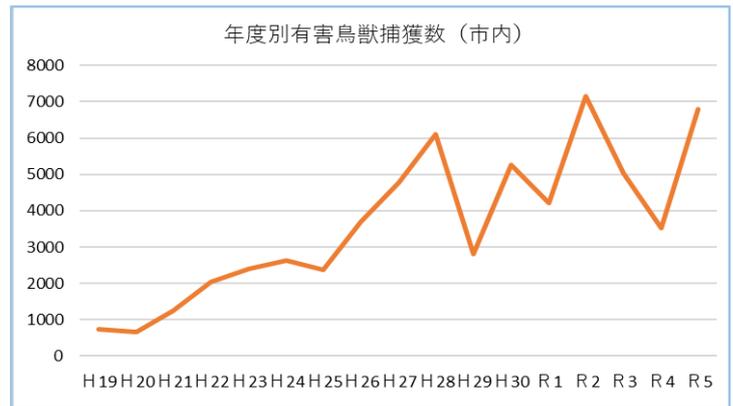
令和6年度市民提案型まちづくりチャレンジ事業に採択され、獣害対策に取り組む団体「丸山トラスト」の代表・元沢信昭さんからお話を伺いました。（前号つづき）



獣害は自然災害

南房総市の高齢化率は約47%、丸山地区の有害鳥獣従事者の高齢化率は約70%。高齢化や人口減少の一方、多産のイノシシは増えるばかりです。獣害対策にかかる時間や労力、危険と隣り合わせというリスクは少なくなく、個々の力で対応する時代ではもうありません。IoTを活用し罠が動いたことを知れば、捕獲の効率にもつながるほか、その近くを通るときに警戒して歩いたり、安全に暮らすための情報も共有できます。

「獣害は自然災害」と元沢さんは言います。「もし土手が崩されたらその土地の持ち主がやらないといけない、でも崩した主は土地の境界線関係なく動くイノシシ。台風通過後に瓦と一緒に片づけたりという話のように地域で取り組んでいくことが大事です。獣害対策がもっと当たり前の防災の一環として位置付けられたら」と元沢さんは考えています。



自然と暮らしとテクノロジー

元沢さんは、自然が好きで南房総・丸山地区へ移住しました。「農村の『ザ・里山』の景色があるのは、住んでいる人が草刈りしたり、日々の生活を安全に継続できているからというのは、移住後に知った。しかし、イノシシに斜面が崩されたり、高齢化や人が少なくなって草刈りも大変。暮らしに根ざした風景を継続していくことが危ぶまれている。」

その解決の鍵がテクノロジー。「日本全体でテーマになっている農業（の衰退）や人口減少の最先端地域で、一次産業にIoTを組み合わせると、すごい労力が軽減できる。自然と暮らしとテクノロジーを融合させることで、その景色も暮らしも持続性が生まれるのではないかと、IoT機器を活用した獣害対策に取り組んでいます。」

獣害対策に地域で取り組む

一般に消費者と生産者は切り離されているところがあると、元沢さんは話します。毎日田んぼに出て、もうすぐ収穫のタイミングでイノシシに荒らされてしまうこともあります。

「農家の方が大変な思いをして辞める人も出てきている。イノシシ問題が出る前と後の農業は負担もコストも全然違う。それに加えてやらなければならないようになった獣害対策に、消費者がどれだけ目を向けたり手をかけたりしているのか。捕獲は専門で免許も必要ですが、農業の一環になっている問題を獣害対策従事というところだけに投げないで、稲刈り体験のように、獣害対策やその実態を知る入口として防護柵体験などができたらいいと思う。」

個人の対策には限界があり、負担が集中してしまっても長続きしません。暮らしを守り、獣害による被害を軽減するため、地域全体で考えていく必要があると思います。

